

食う・寝る・遊ぶ

(2007.1.5)



幼児期の子どもの成長、発達にとって、最も大切なこととして、**食べること（食育）、生活リズム（良く寝ること）**、そして、子ども集団で十分に**遊ぶこと**が挙げられてきた。しかし、今はどうだろう。食育も生活リズムも遊びさえ子どもに十分に保障されていない。それどころか、親も子どもも、そんなこと考えられないほど追いつめられ、うろたえさせられている。「今からやらないと間に合わないですよ」と悪魔がささやき親は不安をあおられる。育児の基本どころではない、という気持ちも分るが、基本は守らなければならない。

まず、**食育**について。貧しくとも家族揃っての夕餉の団欒より、手早く簡単なファーストフードが受けている。孤食、レトルト、添加物、手抜きが子ども達の健康と心を蝕んでいく。食事は地域と家庭の文化であり、有害な薬漬けのものではない地場の食材を使った、お母さん手作りのお袋の味を大切に**するスロースーパード**運動が叫ばれている。幼稚園では、一口食べては歩き回ったり、食事に集中できない子がいる。おかずだけを先に食べて、ふりかけを沢山かけて食べたりする。お母さんと家族の愛情あふれる食事から、体や脳の栄養ばかりか、心の栄養や、人間として大切なことを体に付けていく。朝食をしっかりと食べて来ている小学生と、そうでない子では、学習効果に格段の差が出ていたという報告がある。食事を大切にしたい。

次に**生活リズム**。24時間営業の店も多くなった。社会環境が変わり、大型ショッピングセンターやカラオケ店では、夜中に子連れの若い親子連れの姿が見られると言う。「**寝る子は育つ**」と昔から言われるように、**幼児は十分な睡眠を必要とする**。大人の生活リズム

また、子どもは遊ぶことで、社会性を育て、脳の前頭連合野を発達させてきた。ここが発達しないと他の分野も発達しないと言われる。**遊ぶことで、人とうまく関わる力を育て、やるべきこと、やってはいけないことを体で覚える**。大人の干渉の中では、これらは育たない。人間は自主的に自由に考え、行動することが大切である。学習能力を育てるには自主性、自発性が大切である。幼児教育学ばかりか、心理学等の世界では実証されてきたことである。早期教育を受けた子が、最初の優位を保つのは3年生位までで、子どもの自主性、自発性を重んじてきた子に追い越されてしまう。塾に通わせて、後はテレビ・ビデオに育児を任せてしまうより、テレビを消して良い絵本を読み聞かせて、ゆったり子育てした方が楽しいと思う。

今年も宜しくお願いします。



親のあり方

(2007.2.1)



先月に続き、子ども達のことを考えてみました。こんなに“いじめ”や“不登校”ホームレスや弱者をみんなで寄ってたかって、なぶり殺してしまう子ども達の異常さは、どこから起こっているのか、私たち大人が、真剣に子ども達の側に立って、考えなければならないと思います。大人の側の勝手な論理で、子ども達を追い詰めて行っても、何の解決にもなりません。かえって事を深刻にしてしまう。教育改革国民会議では、子どもの側からの議論ではなく、今よりもっと、締め付けるような議論ばかりです。子ども達は競争と抑圧の中で、心も体も疲れきっています。仲間や弱い者をいじめ、拳句は、親をも殺し、自らも殺す自傷行為を繰り返しています。私達は、子ども達のあがき、叫びを聞き、自らの生活と社会を是正しなければならないと思います。そこで、私達大人が子ども達の先輩として、親としてのあり方を考えてみました。

親の都合で、子ども達の生活を侵していませんか？

- 生活のリズムは、子ども達に合わせましょう。
- 親の気分で、子ども達を叱っていませんか？
- 子ども達は、一人一人良いところがあります。誉めることを忘れていませんか？
- 良いこと、悪いことの基準が夫婦で違っていませんか？
- 一家の規範は絶対に守りましょう。しかし、規範にない細かなことは目をつぶりましょう。親自身も子ども甘やかしてはいけません。
- 子どもの成長段階と子どもへの親の認識にズレはないですか？子どもも親と同じ人格として認めましょう。しかし、長幼の序は守りましょう。
- 子どもの話しをしっかりと聞きましょう。「後でネ」はだめです。
- 他人を思いやる心を、親が行動で示していますか？
- 家族の間で「おはよう」「ただいま」「ありがとう」「すみません」が、習慣になっていますか？
- 子どもの前で、祖父母、親同士、先生の悪口を言っていないですか？
- テレビを消して、できる限り食事は一家で揃って食べましょう。
- テレビより、毎日絵本を読んであげてください（同じ本でもよい）。

ざっと思いついたことを書き綴りました。ほんの一例です。親のあり方を考えるきっかけにして下さい。子どもは親の言う通りには育ちませんが、親のやるように育ちます。親の行動をしっかりと見ています。親の一生懸命さを見て、尊敬します。ああいう大人になりたい、と思います。身勝手な振る舞い、いい加減な行動をマネするようにもなります。子ども達が伸び伸び、ハツラツとした楽しい生活を送れるようにしたいですね。

年寄りの役割

(2007.3.1)



エジプトかギリシャか忘れたが、古代遺跡の中から出てきた、石に刻まれた文章を解読したところ、「今の若い奴等は・・・」と書かれていたという。「今の若い奴等は・・・」は、人類の歴史と共に語り続けられてきたことなのだが、若い奴等ばかりか、年寄り（私もその一人だが）にも困った人がいる。

先日、病院へ行った時のこと。その日は雨模様だった。病院の入り口付近で、前に行くおじいちゃんが、片手で杖をつき、もう一方の手に傘と荷物を持ち、私の前を歩いていた。玄関に差し掛かった所で、私は咄嗟におじいさんを追い抜いて、ドアを開けようとした。すると、おじいさんの怒声が響いた。「ナンダヨー」。私は黙って玄関のドアを開けて、入るまでドアを押さえていた。しかし、とても悲しく、悔しくなった。「あーあ、余計なことをしなければ良かった」と思いながら、待合室の椅子に座っていると、リハビリ室におじいさんの姿が見えた。私は気持ちがすっきりしないので、おじいさんのところに行って、「私は、ただ、ドアを開けてあげようとしただけなんだよ」と言った。おじいさんは、少しバツが悪そうな顔をしながら、何度も頭を下げた。私はおじいさんの肩をポンとたたき応えた。

それから数日後、東京駅発の高速バスでのこと。出発時間も過ぎて正に動きだそうとした時。おじいさんがバスのドアのところに駆けつけた。運転手は前を向いたまま気付かない。私が声をかけると親切にドアを開けた。走り込んだおじいさんが、運転席を通り過ぎて行ってしまったので、運転手さんが「切符を下さい」と2度程言ったところ、大きな声で「そんなこと分かってる！」と怒鳴った。

どうしておじいさんは怒りやすくなるのだろうか。日頃、若い人に追い越されたり、邪魔にされているからだろうか。若い頃と違って、自分の思い通りに体も動かなくなったり、社会の中での存在感がなくなった自分にイライラしているのだろうか。昔は、年寄は家や地域のご意見番で、子ども達と家と地域を守ってくれていた。困ったことがあると、若い人にアドバイスもできた。そのお陰で、若い人が安心して外に出て働くことができた。年寄の役割がちゃんとあった。地域が崩壊し、核家族化した現代では、お年寄の役割がなくなってしまったのだろうか？少子高齢化が進む中で、私は年寄の役割は大きいと思う。忘れっぽくなったり、動けなくなったと言っても、経験と技術と深い思考力は、まだまだ使える。大家族の中ではなく地域の中で、昔と同じように、若い人のバックアップだってできる。こんなところに少子化を止める手立てがあるような気がした。

子ども叱るな・・・来た道だもの 年寄り笑うな・・・行く道だもの

それぞれが理解し合い、協力し合わなければならないと、つくづく思う。



子ども達の楽園

(2007.4.9)



自分達の思い通りの国民を作ろうと、政財界が教育に口を出して、教育基本法の理想を実現するどころか、おかしな方向へ向かってしまった挙句に、子ども達と社会の未来がかかっているその基本法をバタバタと改正(?)してしまった。そして、今度は、教育再生会議で「ゆとり」の見直し、学力向上、いじめをした生徒への出席停止措置の活用等があげられている。こういった傾向は、幼稚園の教育にもその陰は落としかけているように思う。

本園の先生達が、卒園児が沢山通っている小学校の運動会に応援に行った。昼の休憩時間に、先生達の所に卒園児が集まって来て、「幼稚園、楽しかった。もう一度、幼稚園に戻りたいーい!」と言い出したところ、そばにいた同級生達が「えー、いいなー。私達の幼稚園は楽しくなかった。二度と戻りたくない。」と言った。よく話を聞いてみると、厳しく叱咤される訓練、練習ばかりの幼稚園生活だった。

「ゆとり教育」は、いつも追い詰められ、ゆとりがない子ども達の生活の中から、不登校、校内暴力、家庭内暴力、いじめ、落ちこぼれなどの問題が生じてきたことへの反省として出てきたことである。しかし、「ゆとり」は徹底しなかった。実際に今の子ども達は、時間的にも、心理的にも、かえって追い詰められ「ゆとり」のない生活を強いられている。学力が低下したのではない。学力の格差が拡大し、成績が悪い子の学力がどんどん低下しているのである。中学生になる頃には、成績低位者は、落ちこぼれ・諦め・荒れる。再生会議の議論を聞いていると、子ども達の置かれている状況、子ども達の思いなど、全く知らずとせず、大人の勝手な論理で、さらに、子ども達を追い詰め、問題の根を深化させかねない。

現行の指導要領では、「豊かな人間性とたくましい児童生徒の育成」を教育目標に挙げている。幼稚園教育要領でも、ゆとりの中で「生きる力」を育むことを重視している。生きる力については「自ら学び、考え、主体的に判断・行動する能力」「自らを律し、他人と協調し、他人を思いやる心、感動する心など豊かな人間性」そして、「たくましく生きる健康・体力」を挙げている。それらを育むために「幼児期にふさわしい生活」を営むことが大切であるとしている。友達と遊びながら、思いやりや人の痛みを知る。

友達と遊ぶゆとりもなく、室内の生活の中で、ゲーム機にとりつかれている生活の中で、どうして学ぶ意欲や生きる力、思いやり、想像力が育つだろう。友達といると、辛いこともあるが楽しい。学ぶって苦しいこともあるが楽しい。知るって楽しい、学校って楽しい、幼稚園って楽しい、生きるって楽しい・・・そういう幼少年期にふさわしい生活の中から、意欲や希望が育生まれる。生きる力、学ぶ意欲が育つ。



子どもが成長する時

(2007.4.9)



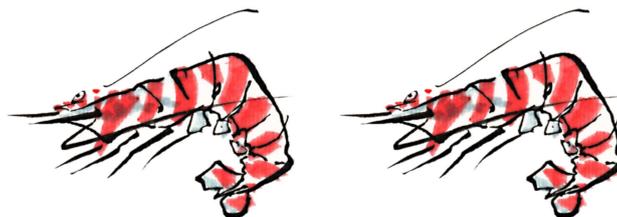
大人は、禁止、命令、約束、けじめが大好きで、大人にとって都合の良い幼稚園が好まれる。

ザリガニ釣りに行く時、先生が全て準備して、子どもはただ釣るだけ、しかも、釣れないと先生がアミですくって一匹ずつ分けてあげる幼稚園と、ザリガニの釣り方の話をして、何が必要か問い、子どもが竿に糸を結びエサを付け、やってみて、釣れない時は、どうしてか考えさせる幼稚園。片付けなさいと口で命令するだけで、先生が片付けてしまうやり方と、片付けなければ、しばらくそのまま放置しておいて、片付けられないのなら、倉庫にしまっしまい、片付けの必要性を感じさせるやり方と、親はどちらを望むのか？ 鼓笛隊や合奏を、見栄え良くするため、音ははずす子のピアノ力を鳴らないようにしたり、運動会の練習を、登園拒否したくなるほど練習させられ、整然と見栄えの良いものを見せられると、あの園は「しつけ」が良いと評価する。サッカーで負けて、動いている時は気付かなかったが、並んでみて初めて人数が違うということに気付き、計算をし、考えさせるやり方と、先生が初めから均等に分けてしまうのと、どちらを選ぶか？

子ども達に、不都合、失敗を経験させるのは時間がかかる。失敗の連続が幼児期。そこから挑戦が始まり成功に結びつき、意欲が育つ。大人は待たなければならない。目標に向かってゆっくり、じっくり歩き、寄り道をさせることも、小さなケガも大切。忘れ物をして悲しい経験も必要、飛び上がるほど嬉しい感動もさせたい。

また、子どもは遊ぶことで、社会の中でやるべきこと、やってはいけないことを体で覚えていく。悪いこともする。それは遊びの中での悪さ、子どもの中でルールを作り、どう行動すべきか、体験していく。ルールを破れば「ズルイぞ！」と仲間から制裁を受ける。しばらくは仲間に入れてもらえないこともある。相手が自分の非に気付き、仲間としての関係を求めてくれると許される。これはイジメではない。しかし、制裁が長期になったり、限度を超せばそれは本当の「悪」である。仲間同士での体験がないと「悪」に気付かない。イジメはいけないことと文章や言葉で言っていて分かっていても、幼児期から体で体験していなければ、心から理解することはできない。幼児期の少々の「悪さ」には目をつぶって、自ら不都合や不正を感じさせることが必要である。

意欲は、困難・失敗を乗り越えて、満足感・達成感を味わった時に培われる。思いやりは豊かな感情、体験なしには育たない。



キズバンは子どもの勲章

(2007.6.1)



子どもにケガはつきものです。走って転べばヒザを擦りむくのは当たり前です。活発に良く遊ぶ子どもほど、ケガの危険性が多くなります。しかし、そういう子にとっては擦り傷程度は、ケガとは呼ぶほどのことではありません。ヒザにキズバンをしているのは、良く遊んでいる証拠で、子どもの勲章と言っても良いでしょう。しかし、骨折や捻挫は、できる限りなくしたいものです。それでもサッカーやアスレチックなどでは起こります。サッカーでは危険なラフプレーや、アスレチックでの危険な使い方を厳しく指導することで、大きなケガを予防します。

しかし、ケガに恐れるあまり、子ども達の活動を抑え込んでしまえば、ケガを予見、回避し、予防する能力を身に付けることができなくなります。危険を回避する身のこなしや、調整力を育てることができなくなります。大きなケガを先送りするだけになってしまいます。

ただし、絶対に危険な環境は極力取り除いておかなければなりません。例えば、昔、公園などで見かけた「箱ブランコ」「遊動円木」などは、予防能力どころの話ではありません。

活発な活動の中で、小さなケガを少しずつすることで、大きなケガを回避する能力や体力がついてきます。これからも子ども達が、安全で伸び伸びと育っていく環境を、守っていきます。



人間形成の基礎作り

(2007.7.2)



最近、とても気になることがあった。いつも、パニックを起こしたように泣いてばかりで、特に障害があるわけでないのに、ヨタヨタとまるで赤ちゃんのようにしか歩けない子がいる。近くの友達に突然噛み付いたり、暴力を振るったり、上靴と下足の区別ができず、泥足のまま室内を歩き回り、集団生活になじまない子がいる。そういう子は、激しい動きをするのですが、リズムに合わせたり、調整力を必要とする動きは全然できない。

幼稚園教育は、小学校教育以降の人間形成の生活や学習の「基盤」を培う役割を担っている。この基盤を培うとは、小学校以降の子どもの発達を見通した上で「幼児期に育てるべきこと」を、しっかり育てることである。そのことが小学校以降の生活や学習においても重要な「自ら学ぶ意欲」や「自ら学ぶ力」を養うことに繋がる。大抵の早期教育と言われるものは「幼児期に育てるべきもの」を無視して、小学校以降でやるべきものを、単に先取りしただけで、学ぶ意欲や学ぶ力を奪ってしまうように思えてならない。

幼児期には、これだけは守りたいものがある。第一は、毎日が楽しいことである。子どもが、目を輝かせて生き生きと生活すること。人生って、生きるって楽しいと、心から実感することが、人生に対して意欲的になり、生きる力を育てる。そのための楽しい体験をたくさん保障するのが幼稚園である。第二に、そのたくさんの体験の中で「僕はやれる。僕はできる。」という自信と有能感を育てることだ。生活の中で壁にぶつかることはある。しかし、生活の様々な場面で自信に満ちた意欲が育てられることである。第三に、知的な発達である。知的な発達というと頭だけ考えがちであるが、全身を考えないといけない。手を使い、身体を動かすのは頭脳と連動しているのである。そして、更に付け加えるなら、友達と十分に遊び込むことが重要である。社会力（前頭連合野の部分）が育たないと、他の知能も育たないことは、現代では立証されている。



子どもの感性を磨く

(2007.9.3)



昔、職員室脇の花壇に咲いたユリの近くを通りかかった子が、急に立ち止まり、ユリの香にうっとりとして目を細めて顔を近づけた。その子に気づいた人が、背後から、「ユリにはね、オニユリ、〇〇ユリ、××ユリといっぱいあるけど、このユリは何ていうユリか知ってる？」と尋ねた。子どもは急に不快な顔になって、みごとな答えをして走り去った。「バカ！」と・・・。

梅雨の頃に野立ての茶会に招かれた人の話が心に残った。茶室には、短冊がかかっていた。それには「雨滴聲（雨の滴の声）」と書かれていた。池に噴水があり、その水音が少しあった。お点前が始まって間もなく、正客の老師が短冊を指して「この音が聞こえない」と噴水を止めるように注文を付けた。短冊は「五月雨です。暫くは滴の音を聞いて下さい」という客に対する気持ちを見立てたものである。雨の滴の音を聴くのなら、この際は、それ以外のものは一切邪魔だと教えたのだ。この美意識に感動した。教育とは、教師と子どもが教材をはさんで、色々な世界に見立てていく創造の営みである。そこには、まず教師に豊かな感性が求められる。こんな主旨であった。

川の瀬音、小鳥のさえずり、木々を渡る風とさざめきを全て消し去るように、一日中、大音響を流している幼稚園がある。もっとゆったりと、心と肌で自然を感じ、感性豊かな子どもを育てたい。私の家の近くの公園では、毎夏、夜遅くまで若者達が集って花火を上げ、バカ騒ぎをしている。夏の情緒も何ともない、やたらと騒がしいロケット花火などである。私も花火は大好きである。特に好きなのは、遠く夏の夜空にパッと開いて静かに散っていく花火である。線香花火もいい。キャンプや海に行っても同じことをしている。漆黒の闇と満天の星座をじっと眺めては、遠い宇宙や天空に思いをはせる方がずっと子ども達の情操教育になるのだが・・・。

幼児教育の世界で、情緒・情操を育てることが大切にされてきた。感性を育てることも同様に語られてきた。自分の周囲の人々や、自然に心を動かし、美しさや優しさを感じることは、人として安定した、豊かな心を育てることに繋がる。又、自然や事物に不思議さや面白さを発見し、感動することが、感性や表現する力を養い、創造性を豊にする。心を育てることが、今、一番求められなければならないのに、最近では、情緒・情操・感性などという言葉があまり聞かなくなってしまう。もっと手っ取り早く、知識を詰め込むことが優先されているのだろうか。



意欲を育てる

(2007.10.1)



幼児期の子ども達にとって、最も大切なことは `意欲、を育てること` `自尊感情、を育てること` です。意欲がなく、すぐに逃げてしまう子どもが増えています。「できないから」「やったことがないから」「教えてもらってないから」と尻込みしてしまいます。誰もが初めてのことはやったことがないのです。やってみなければできるようにならないのです。

体の小さなUくんが、頼みもしないのに、「逆上がりできるよ、見せて上げる」と口をとがらせ、鉄棒をつかんだ。真剣な顔になって、自分の背丈よりも高い鉄棒をにらみつけ、大きく深呼吸すると、思い切り大地を蹴って、グンと鉄棒に体を引き、みごとに一回転した。私がオーバーに「オー、スゴイ！格好良い！」と叫ぶと「だって、いっぱい練習したんだ」と、手のひらを見せた。ママがつぶれて痛々しかった。「君はやれば何でもできちゃうんだ。スゴイゾ、スゴイゾ」と前より一層驚き、賞賛した。彼は少し鼻を高くして、気持ち良さそうに去って行った。

Tくんは、いつも遊びに入り込めず、夢中になれない。いつもフラフラと遊んでいる。リレーの練習の時、クラスみんなが一生懸命走り、バトンを真剣に繋いでいるのに、途中で歩いてしまい、バトンを次の走者に渡さず、投げようとした。気持ちは分かります。みんなに抜かされ、自分のプライドはズタズタです。私はTくん「早くたってダラダラ走っている子はビリ。遅くたって一生懸命頑張る子が一番で優勝なんだ。園長先生は、君が今度走る時は一生懸命応援するぞ。思い切り最後まで走り、次の人にバトンをしっかり渡せるね。他の誰が早く走ろうが、そんなこと関係ない。自分の力を出すこと！」と話した。次に走る時、彼は全力で走った。力を出し切って、地面にヘタリ込んだ。私はみんなの前で彼を讃えた。みんなが彼に拍手した。彼は下を向いてテレくさそうにしていたが、嬉しそうだった。

私達は、子ども達のためにと、叱咤激励しているつもりなのに、時として、子ども達の意欲や自信を奪っていることがあります。自尊感情を傷つけていることがあります。運動会、走るのが苦手な子もいます。確かに競い合うから面白くなるのですが、勝敗や順位より、力いっぱい自分の力を出すことが大切であることを伝え、そこを認めて、誉めてあげて欲しいと思います。僕は認められている、愛されていると感じることから、意欲が生まれ、自信が育ち、自尊感情を持てるようになります。幼児期の子ども達は、誰もが一番で、僕はすごいんだ、何でもやればできるんだと思っているのが、健全だと思います。



子どもの脳の発達と大人の役割

(2007.11.1)

NOVEMBER 

相変わらず大脳教育と評して、駅名や国旗を暗記させたり、軍隊みたいな訓練を強いているあやしい幼児教育が、まだあります。脳の働きは研究が進み、人間を人間たらしめているのが、頭の前側にある前頭前野の部分であることが明らかになっています。例えば思考する能力、計算したり、本を読んだり、言葉を話したり、何かしようと意思決定する、社会のルールを守ろうとする気持ち、感情をコントロールする理性、記憶、コミュニケーション能力等は、全て前頭前野が担う役割です。重量だけで計れば、人間の脳は四～五歳ですでに90%できてしまいます。前頭前野もこの時期までに急激に発達します。

この時期に、いかに子ども達と上手に接するかが重要で、子ども達のその後の人生を決める可能性が大きい。用不用の原則という言葉があります。体も脳も、使えば使うほど、鍛えられ、発達しますが、使わなければ能力は低下します。問題は、何をすれば発達するかです。まず第一に、大いにコミュニケーションをとることです。話し掛けたり、笑い掛けたり、抱っこしたりといった触れ合いが大切です。そして、自我が芽生え「自分でやる」と言い出す頃には、絵本の読みきかせ、お父さん、お母さん、友達とたくさんお話をする、色んなものを作ることが有効です。小学校以降では、読み、書き、計算も大いに有効ですが、それだけでは読み、書き、計算が得意な子どもにしかありません。大切なことは、脳を使って様々な体験を積む事です。

幼児期にはまず「話す」能力です。私達は物を考える時、必ず言葉を介して考えています。手を使った作業も、体を使った運動も、脳に良い刺激になります。何かを作る、集団でルールを作り、ゲームをする。コミュニケーションが複雑に絡み合う遊びでは、子どもの脳は急激に活性化します。反対にテレビゲームをしている時、テレビを見ている時、パソコンに触れている時は、前頭前野は停止状態になっていることが実験で証明されています。しかし、「読書」をしている時は、脳は活性化します。子どもの読書の習慣が身につかないのは、家庭環境です。保護者に読書の習慣がなければ、子どもは本を読もうとしません。高齢者の脳の研究で、痴呆とは無縁の七十代、八十代のお年寄りがいました。その人達に共通していたのは読書の習慣でした。読書は脳を若々しく保つのに、とてもいいことらしいのです。

ふたば文化幼稚園の「たくましく 大地に根を張れ ふたばっ子」のたくましさとは、心も体もたくましい子を育てることです。脳は心と体の一部です。正しく、良く使って伸び伸びと育てます。



「三つ子の魂百まで」 その一

(2007.12.3)



子どもに関わる事件の報道がある度に、マスコミが読者の興味をそそるような衝撃的な報道を行い、人々を不安に落とし入れます。そして、「普通の子」、「問題のない家庭の子」と伝えるので、一層、人々の不安を増幅させます。そして、入学したばかりで、何の責任もなく、何も分からない中学・高校の校長を引っ張り出します。校長は「家庭教育の問題で、学校の責任はない」とは言わず、分かる筈がないので、しどろもどろの発言をします。

事件が忘れられる頃に、詳しい調査結果が出て来ます。その調査結果から、幼児期に大きな素因があることが分かります。多くの場合、「普通に」愛情深く育てられていないことが分かります。特別なことは必要ないのです。常識的な「当たり前」の育児をすることです。なにも、心配したり怯えたりせず、愛情に包まれ安らかに生活する中で、その子のために幼児期にしておかなければならない適切な躰や家庭教育（勉強を教えるだけが教育ではない）を行うことが必要です。親の勝手な見栄や、思い込みの虐待に近い躰と、自由・個性尊重という美名での、育児放棄、躰放棄が増えています。こういう環境の中では、子どもはいつも不安であったり、怯えて（不安と恐怖）生活をします。「心」が不安定では心が育たず、青少年期に健全な親離れ・子離れができなくなってしまいます。

「普通に」「当たり前」の教育とは、乳児期の母親とのスキンシップと深い愛情に包まれた安定した環境、そして幼児期の基本的な生活習慣、即ち、「食う」・「寝る」・「遊ぶ」を守ることです。家族揃って、美味しく楽しく食事をする（食育）。早寝早起き、ゆったりとしたリズムのある生活習慣を作り、ぐっすり眠ること。沢山の友人関係の中で、十分に遊び込むこと。こうした生活の中で、子ども達は人間として必要なことを身に付けていきます。・・・来月に続く・・・

